

半七捕物帳

川越次郎兵衛

岡本綺堂

青空文庫

四月の日曜と祭日、二日つづきの休暇を利用して、わたしは友達と二人連れで川越の喜多院の桜を見物して来た。それから一週間ほどの後に半七老人を訪問すると、老人は昔なつかしそうに云った。

「はあ、川越へお出ででしたか。わたくしも江戸時代に二度行つたことがあります。今はどんなに変わりましたかね。御承知でもありません。川越という土地は松平大和守やまとのかみ十七万石の城下で、昔からなかなか繁昌の町でした。おなじ武州の内でも江戸からは

相当に離れていて、たしか十三里と覚えていますが、薩摩芋でお馴染みがあるばかりでなく、江戸との交通は頗る頻繁の土地で、武州川越といえは女子供でも其の名を知っている位でした。あなたはどういう道順でお出でになりました……。ははあ、四谷から甲武鉄道に乗って、国分寺で乗り換えて、所沢や入間川いるまがわを通って……。成程、陸おかを行くとそういう事になりましたよ。江戸時代に川越へ行くには、大抵は船路でした。浅草の花川戸から船に乗って、墨田川から荒川をのぼって川越の新河岸へ着く。それが一日夜とはかかりませんから、陸おかに行くよりは遙かに便利で、足弱の女や子供でも殆ど寝ながら行かれるというわけです。そんな関係からでしょうか、江戸の人で川越に親類があるとかいうのはた

くさんありました。例の黒船一件で、今にも江戸で軍いくさが始まるように騒いだ時にも、江戸の町家で年寄りや女子供を川越へ立退たちのかせたのが随分ありました。わたくしが世話になっている家でも隠居の年寄りと子供を川越へ預けるといっているので、その荷物の宰領や何かで一緒に行ったことがあります。花の頃ではありませんでしたが、喜多院や三芳野天神へも参詣して来ました。今はどうなつたか知りませんが、その頃は石原町というところに宿屋がならんでいて、江戸の馬喰ばくろうちょう町のような姿でした」

老人の昔話はそれからそれへと続いて、わたし達のようにうっかりと通り過ぎて来た者は、却つて老人に教えられることが多かった。そのうちに、老人はまた話し出した。

「いや、この川越に就いては一つのお話があります。あなた方はむかし一書き物を調べておいでになるから、定めて御承知でしょうが、江戸城大玄関先きの一件……。川越次郎兵衛の騒ぎです。あれもいろいろの評判になったものでした」

「川越次郎兵衛……何者です」

「御承知ありませんか。普通は次郎兵衛と云い伝えていまして、ほんとうは桑次郎くめという人間で……」

どちらにしても、私はそんな人物を知らなかった。それに関する記録を読んだこともなかった。

「御存じありませんか」と、老人は笑った。「なにしろ幕府の秘密主義で、見す見す世間に知れていることでも、成るべく伏せて

置くという習慣がありましたから、表向きの書き物には残っていないのかも知れませんが。いつぞや『金の蠟燭』というお話をしたことがあります。その時に申し上げたと思いますが、江戸の御金蔵破り……。あの一件は安政二年三月六日の夜のこと、藤岡藤十郎と野州無宿の富蔵が共謀して、江戸城内へ忍び込み、御金蔵を破って小判四千両をぬすみ出したので、城内は大騒ぎ、専ら秘密にその罪人を詮議している最中、その翌日、則ち三月七日の昼八ツ（午後二時）頃に、何処をどうはいつて来たのか、ひとりの男が本丸の表玄関前に飄然と現われて、詰めている番の役人たちにむかって『今日じゆうに天下を拙者に引き渡すべし。渡さざるに於いては天下の大変出しゅつたい来いたすべしと、昨夜の夢に

東照宮のお告げあり、拙者はそのお使にまいった』と、まじめな顔をして、大きい声で呶鳴ったから、役人たちもおどろきました。

その男は手織縞の綿入れを着て、脚絆、草鞋という扮装いでたちで、

手には菅笠を持つている。年のころは三十前後、どこかのくにもの国者であることはひと目に判ります。こんな人間が江戸城の玄関へ来て、天下を渡せなぞという以上、誰が考えても乱心者としか思われません。この時代でも、相手が気違いとなれば役人たちの扱ひも違います。本気の者ならばすぐに取り押さえて縄をかけるのですが、気違いである上に、仮りにも東照宮のお使と名乗る者を、あまり手荒くすることも出来ない。ともかくも一応はなだめて連れて行って、それから身許その他の詮議をしようとする、男は

なかなか動かない。東照宮を笠に着て、なんでも天下を渡せと強情に云い張っているのです、役人たちも持て余しました。

場所が場所ですから、こんな人間をいつまで捨てて置くわけには行きません。宥^{なだ}めても賺^{すか}しても肯^きかない以上、いくら氣違いで、東照宮のお使でも、穩便に取り扱っていは果てしが無い。

二人の役人が両手を取って引き立てようとすると、そいつは力が強くて自由にならない。とうとう大勢が駈^{あば}け集まって暴れる奴を押さえ付けて繩をかけてしまいました。まったく斯うするよりほかはありません。本人は口を結んでなんにも云いませんが、その笠の裏に武州川越次郎兵衛と書いてありました。

してみると、川越藩の領分内の百姓に相違あるまいというので、

早速にその屋敷へ通知して、次郎兵衛を引き取らせる事になりました。昔はどうだったか知りませんが、幕末になつては相手が乱心者と判つていれば、余りむずかしい詮議ありませんでした。川越の屋敷でも迷惑に思つたでしょうが、武州川越と笠に書いてあるのが証拠で、自分の領内の者を引き取らないと云うわけには行きません。殊にそれが御城内を騒がしたのですから、恐縮して連れ帰ることになりました。

そこで、第二の問題は、その次郎兵衛がどうして御玄関先きままで安々と通りぬけて来たかということ、途中の番人も当然その責任を免かれない筈です。そうなると、ここに大勢の怪我人ができる。それも宜しくないと云うので、かの次郎兵衛は天から落ち

て来たという事になりました。いや、笑つちやあいけない。昔の人はなかなか巧いことを考えたものです。つまり彼の次郎兵衛は天狗に攫さらわれて、川越から江戸まで宙を飛んで来て、お城のなかへ落とされたと云うわけです。こうなれば、誰にも落ち度は無い。天狗を相手に詮議も出来ないから、所詮はうやむやに済んでしまいました。

そうすると、今度は川越の屋敷から本人を突き戻すと云つて来ました。成程その笠には武州川越次郎兵衛と書いてあるが、屋敷へ連れ帰つて調べてみると、彼が所持する臍ほそ緒書おがきには野州宇都宮在、糸蔵の長男糸次郎とある。それが本当だと思われるから、当屋敷には係り合いの無い者であるとするのです。そう云えば其

の通りで、手に持っていた笠を証拠にするか、肌に着けている臍緒書を証拠にするかと云うことになれば、まず臍緒書を確かなものと認めるよりほかはありません。笠は他人の笠を借りることが無いとは云えない。また粗相で取り違えることもある。しかし他人の臍緒書を身に着けているなどは滅多に無いことです。なにしろ川越の屋敷の云うことも一応の理窟が立っているので、こちらでも押し返しては云えません。天狗の本元争いをすれば、宇都宮の人間が日光の天狗に攫われたと云う方が本当らしいようにも思われます。いずれにしても、本人の身許判然とするまでは、一時当方に預かり置くと云うことになりました。

その日の夕六ツ頃に、町奉行所の指図で八丁堀同心坂部治助、

これは『大森の鶏』でおなじみの人です。この坂部という人が、丁度そこに来合わせていた住吉町の竜蔵の子分二人を連れて、川越藩の中屋敷へ受け取りにゆくと、その帰り途中で次郎兵衛が暴れ出した。それを取り鎮めようとしていると、俄かに旋風がどつと吹いて来て、あたりは真つ暗、そのあいだに次郎兵衛のすがたが見えなくなってしまうたと云うのです。これも前の天狗から思い付いたことで、恐らく油断をして縄抜けをされたのでしよう。縄抜けでは自分たちの落ち度になるから、これも旋風にこじつけたものと察せられます。前が天狗で、後が旋風、こういうことで何とか申し訳が立つのですから、今から思えば面白い世の中でした。これで済んでしまえば、何が何やら判らずじまいです。それに

しても江戸城表玄関に立ちはだかつて、天下を即刻拙者に引き渡すべしと呶鳴つたなぞは、権現さま以来ただの一度もない椿事です。すから、その噂は自然に洩れて、忽ちぱつと世間に広がりました。そいつも御金蔵破りの同類で、白昼大胆にも御玄関先きから忍び込もうとしたのだなぞと、尾おひれ鱈を添えて云い触らす者もある。川越の屋敷から受け取った以上、取り逃がしたのはこちらの責任で、表向きは旋風で済んでも、坂部さんは不首尾です。そこで内ないしよ所所でわたくしを呼んで、その次郎兵衛のゆくえを探し出してくれ、それで無いと、自分の顔が立たないと云うのです。

しかし、坂部さんは縄ぬけを正直に云いません。どこまでも旋風に巻いて行かれたように話しているのです。わたくしの方でも

大抵は察していますから、野暮な詮議もしませんが、さてどこから手を着けていいか見当が付きません。笠に書いてある川越次郎兵衛、臍緒書の桑次郎、この二人の身許を探るのが先ず一番の近道ですが、今と違って汽車は無し、十里以上も離れた土地になると、その探索がなかなか不便です。

そんな事でぐずぐずしているうちに、それからそれへと御用が湧いて来るので、旅へ出るような暇がありません。もう一つには、その次郎兵衛という奴は気違いらしい。折角苦勞して探し当てたところで、やっぱり気違いであったと云うのでは、どうも張り合いが無い。坂部さんには気の毒ですが、思い切って働いてみようという気も出ないので、かたがた一日延ばしにもなってしまうた

のです。ところがあなた……。世の中というものは不思議なもので、その次郎兵衛とわたくしとは、どこまでも縁が離れないのでした」

二

『金の蠟燭』の一件も片付き、ほかの仕事も片付いたのは、四月の二十日^{はつか}過ぎである。少しくからだに暇が出来たので、宇都宮か川越へ踏み出してみようかと、半七は思った。

外神田に万^{よろず}屋という蠟燭問屋がある。そこは養父の代から何かの世話になって、今でも出入りをしている店であるので、半七

はその前を通つたついでに、無沙汰ほどきの顔を出すと、番頭の正兵衛が帳場に坐つていた。半七も店に腰をかけて、世間話を二つ三つしているうちに、正兵衛は声をひそめて云つた。

「ねえ、親分。この頃はお城のなかにいろいろの事があるそうです
すね」

金蔵破りは勿論、東照宮のお使一件も、皆ここらまで知れ渡つていたのである。半七も先ずいい加減に挨拶していると、正兵衛は又云つた。

「お城のお玄関に突つ立つた男は、川越の次郎兵衛というのだ
うです
ね」

恐らくお城坊主などが面白半分に吹ふい聴ちようするのであろうが、

世間ではもう次郎兵衛の名まで知っているのかと、半七もいささか驚いていると、正兵衛は続けてささやいた。

「御承知でもありませんが、この町内の番太郎に要作というのが居ります。女房はお霜といいまして、夫婦ともに武州川越在の者で、八年ほど前からここの番太郎を勤めて居りますが、二人ながら正直者で町内の評判も宜しゅうございます。その要作に次郎兵衛という弟がありました……」

川越の次郎兵衛、その名を聞かされて半七も俄かに眼をひからせた。

「それじゃあ何ですかえ。町内の番太郎は川越の者で、弟は次郎兵衛というのですかえ」

「実はその次郎兵衛が江戸へ奉公したいと云つて、川越から三月の節句に出て来ましたそうで……。それが五日の日から行方ゆくえが知れなくなりました」

「番太郎の兄貴の家に行ったのですね」

「そうでございます。兄を頼つて来ましたので、要作から手前どもに話がありまして、こちらのお店で使つてくれないかという事でしたから、ともかくも主人に相談してみようと返事をして置きますと、その本人がすぐに姿を隠してしまいましたので、兄の要作もひどく心配して居ります」

「お前さんはその次郎兵衛という男に逢いましたかえ」と、半七は訊きいた。

「表向きに名乗り合いは致しませんが、番太郎の店にいるのをちらりと見たことがございます。年は十九だそうですが、色のあざ黒い、眼鼻立ちのきりりとした、田舎者らしくない男で、あれなら役に立ちそうだと思つて居りましたが……」

「国へ帰つたという知らせも無いのですか」

「知らせも無いそうです。尤も要作夫婦も忙がしい体ですから、ただ心配するばかりで、別に聞き合わせてやると云うこともしないようですが……」

その以上のことは番頭も知らないらしかつた。しかしそれだけの事を偶然に聞き出したのは、意外の掘出し物である。江戸城へはいりこんだ本人は川越の次郎兵衛でなく、宇都宮の桑次郎であ

るらしいが、いずれにしても笠の持ち主を見つけ出せば、それからひいて其の本人を突き留めることも出来る。半七はよろこんで万屋の店を出た。

四月になって、番太郎の店でも焼芋を売らなくなった。駄菓子とちつとばかりの荒物をならべている店のまえに立つと、要作は町内の使で何処へか出たらしく、女房のお霜が店番をしていた。それを横目に見ながら、半七は隣りの自身番へはいると、じょうば定番んの五平があわてて挨拶した。

「早速だが、こここの番太の夫婦はどんな人間ですね。川越の生まれだそうですが……」

「へえ」と、五平は俄かに顔を曇らせた。「なにかのお調べです

か」

「御用だ。正直に云つてくれ」

「要作は三十一で、女房のお霜はたしか二十八だと思います。川越の者に相違ございません」

「要作には次郎兵衛という弟があるそうだね」

「要作の弟ではございません。女房の弟だと聞いていますが……」
と、五平はいよいよ迷惑ごそうな顔をしていた。

自身番の者も城中の一件を知っているのである。川越の次郎兵衛のことも知っているらしい。しかもそれが番太郎の親類縁者であるということが発覚すると、その時代の習いとして一町内が種々の迷惑ごうむを蒙るおそれがあるので、努めてそれを秘密ひそにしている

のであらうと、半七は推量した。

「いや、心配する事はあるめえ」と、半七は笑いながら云った。

「お城の一件は次郎兵衛じゃあねえらしい」

「でも、笠に書いてあつたという噂で……」と、五平は釣り込まれて口をすべらせた。

「笠は次郎兵衛の物だろうが、その本人じゃあねえようだ。第一に年頃が違つている。誰かが次郎兵衛の笠を持っていたらしい。そうと決まれば別に心配することはねえ、せいぜい叱られるぐらいの事で済むわけだ」

「そうでしょうね」と、五平もやや安心したようにうなずいた。

「しかし親分、その次郎兵衛のゆくえが知れないので心配してい

るのです」

「むむ、そうだ」と、半七もうなずいた。「ここへ次郎兵衛が出て来て、その笠は誰に貸したとか、どこで取られたとか、はつきり云つてくれれば論はねえのだが、ゆくえが知れねえには困つたな。なんにも心あたりはねえのかえ」

「番太の夫婦も心あたりがないと云つています。なにしろ八年も逢わずにいた者が不意に出て来て、また不意に消えてしまったのですから、まったく天狗にでも攫われたようなもんで、なにが何だか判らないそうです。成程そうかも知れませんが」

「十九といえ、もう立派な若けえ者だ。いくら江戸馴れねえからと云つて、まさかに迷子まいごになりもしめえ。たとい迷子になつて

も、今まで帰らねえという理窟はねえ。なにか姉夫婦と喧嘩でもして、飛び出したのじゃあねえか」

「いや、それですよ。要作は隠していますが、女房がちよいと話したところでは、次郎兵衛は義理の兄とすこし折りが合わない事があつたようです。本人は江戸へ出て、武家奉公でもするつもりであつたらしいのを、要作が承知しない。おまえ達が武家に奉公すると云えば先ず中ちゆうげん間まだが、あんな折おりすけ助すけの仲間にはいつてどうする。奉公をするならば、堅氣あきんどの商人あきんどの店へはいつて辛抱しろと云う。それが又、次郎兵衛の氣に入らないので、そこに何かのもんちやく捫もんちやく著ちやくがあつたようですから、若い者の向う見ずに何処へか立ち去つてしまったのかも知れません。しかし江戸にはこれぞ

という知りびとも無し、本人も初めて出て来たのですから、ほかに頼って行くさきも無い筈だと云います。そのうちにお城の一件が知れたので、要作夫婦は蒼あおくなつて、どうぞ自分たちに難儀のかからないようにと、神信心や仏参りをして、可哀そうなくらいに心配しています。あの夫婦はこの町内に八年も勤め通して、何ひとつ不始末を働いたこともないのに、飛んだ弟がだしぬけに出て来て、まかり間違えばどんな巻き添えを受けないとも限らないので、わたし達も共々心配しているのですが……」

五平は同情するように云った。

「そりやあ本当に可哀そうだ」と、半七も顔をしかめた。「だが、今も云う通り、次郎兵衛は笠だけの事らしいから、あんまり心配

しねえがいいと、番太の夫婦にも云い聞かせて置くがよかろう」
「そうすると、次郎兵衛には係り合いが無くつて、唯その笠を誰かに持って行かれたと云うだけの事なのでしょいか。それが本当なら、要作も女房もどんなに喜ぶかも知れません。そこで親分。実はまだこんな事もあるのですが……」と、五平は表を窺いながらささやいた。「日は忘れましたが、なんでも先月末だと思えます。わたしがこの店の先きに出ていると、年頃は三十四五の小粋な年増が来かかつて、隣りの店を指さして、あれが番太の要作さんの家かと訊きますから、わたしはそうだと教えてやると、女は外から様子を窺っていて、やがて店へはいつて行きました、あんな女が番太をたずねて来るのも珍らしいと思つて、わたしもそつ

との覗のぞいてみると、女房が何か応答しているようでしたが、それがだんだんに喧嘩腰のようになって、なにを云っているのか好く判りませんでした。まあ、叩き出すようなふうで、その女を追い帰してしまいました。あとで女房に訊きますと、あれは門違かどいで尋ねて来たのだから、そのわけを云って帰したと云っていました。だが、どうもそうじゃあ無いようで……。今まであんな女を見たことはありませんから、もしや次郎兵衛の係り合いじゃあ無いかとも思うのですが……。はつきり聞こえませんでしたが、その女も女房も次郎兵衛という名を云っていたように思います」

「その女は、江戸者かえ、他国者かえ」と、半七は訊いた。

「江戸ですね。いや、それに就いてまだお話があります。その晩、

もうすっかり暮れ切ってしまったから、十七八の娘がまた隣りへ尋ねて来ました。私はそのとき奥で夕飯を食っていましたが、手伝いの三吉の話では、これも女房に叱られて追い出されたそうです。きりよう容きりよう貌は悪くないが、丸出しの田舎娘で、泣きそうな顔をして出て行ったそうで……。これも隣りの女房はわたし達に隠しているので、詳しいことは判りません」

こうなると、どうしても隣りの女房を一応詮議するのが当然の順序である。

「じゃあ、番太の女房を呼んでくれ」と、半七は云った。

五平に連れられて、番太郎の女房が来た。お霜は二十七八で、眼鼻立ちも醜みにくくなく、見るからかいがいしそうな女であった。彼女は半七を御用聞きと知って、あがり口の板の間にかしこまった。「いや、そんなに行儀好くするにやあ及ばねえ」と、半七は頤あごで招いた。「まあ、ここへ掛けて、仲好く話そうじやあねえか」

「親分に訊かれたことは、なんでも正直に云うのだぜ」と、五平もそばから注意した。

「次郎兵衛はおめえの弟で、川越から江戸へ奉公に出て来たのだね」と、半七は訊いた。「それが三月の三日に来て、五日からゆくえが知れなくなったと云うのは本当かえ」

「はい。五日の夕方どこへかふらりと出て行きました、それぎり音も沙汰もございません」と、お霜は答えた。

五平の話したとおり、本人は屋敷奉公をしたいと云い、要作は町奉公をしろと云い、その衝突から飛び出したのであろうと、彼女は云った。しかし弟は年も若し、初めて江戸へ出て来たのであるから、むやみに家を飛び出しても、ほかに頼るさきはない筈である。さりとて故郷へ帰ったとも思われず、どうしているか案じられてならないと、彼女は苦勞ありそうに云った。

番太郎へたずねて来た二人の女に就いて、彼女はこう説明した。「三月二十八日のお午過ぎひるでございました。浅草の者だと云つて、粹な風体ふうていの年増の人が見えまして、次郎兵衛に逢いたいと云う

のでございます。まさかに家出をしましたとも云えませんが、まあいい加減に断わりますと、むこうではわたくしが隠しているとても疑っているらしく、強情に何のかのと云って立ち去りませんで、わたくしもしまいは腹が立って来まして、つい大きい声を出すようにもなりました」

「女はどうとう素直に帰ったのだな」と、半七は訊きいた。

「はい。帰るには帰りましたが、帰りぎわに何だか怖いことを云って行きました」

「どんなことを云った」

「あの人にそう云ってくれ。あたしは決しておまえを唯では置かない。それが怖ければ浅草へたずねて来いと……」

「その女は江戸者だな」

「着物から口の利き方まで確かに下町したまちの人で、なにか水商売でもしている人じゃあないかと思ひます。初めて江戸へ出て来た弟がどうしてあんな人を識しっているのかと、まったく不思議でなりません」

「おめえの弟は田舎者でもきりりとしていると云うから、素早く江戸の女に魅みこまれたのかも知れねえ」と、半七は笑つた。「女は浅草とばかりで、居どころを云わねえのだな」

「云いませんでした。次郎兵衛は知っているのでございましょう」
「それから、また別に若けえ女が来たと云うじゃあねえか。それはどうした」

「それは、あの……」と、お霜は云い淀んだように眼を伏せた。

「それはおめえも識っている女だな。おなじ村の者か」

お霜はやはり俯向いていた。

「なぜ黙っているのだ。その女は弟のあとを追っかけて来たのか」と、半七は畳みかけて訊いた。

「いえ、そういうわけでは……」と、お霜はあわてて打ち消した。「それにしても、おめえも識っている女だろう。名はなんというのだ」

「お磯と申しまして、おなじ村の者ではございますが、家が離れて居りますのと、わたくしどもは久しい以前に村を出ましたのでよくは存じません。親の名を云われて、初めて気がついたくらい

でございます。これも江戸へ奉公に出て来て、浅草の方にいるとばかりで、くわしいことを申しませんでした」

「これも浅草か」

「これもやはり弟に逢わせてくれと申しまして、なかなか素直に帰りませんのを、わたくしが叱って追い帰しました」

「おめえの弟はよつぽど色男らしいな」と、半七はまた笑った。

「年増に魅こまれ、娘に追っかけられ、あんまり豊年過ぎるじゃあねえか。それだから天狗に攫われるのだ。そうして、女二人はそれつきり来ねえのか」

「まいりません」と、お霜ははつきり答えた。「それぎりでも再び姿を見せません」

「お磯の親はなんというのだ」

「駒八と申します」

駒八は相当の農家であつたが、いろいろの不幸つづきで今は衰微しているという噂であると、お霜は付け加えて云つた。

「じゃあ、まあ、きようはこの位にしよう」と、半七は云つた。

「おめえは今度のことに就いて、亭主と夫婦喧嘩でもしやあしねえか」

お霜は黙つていた。

「弟の肩を持つて、亭主と喧嘩でもしやあしねえか。ふだんもそうだが、こういう時に夫婦喧嘩は猶さらきんもつ禁物だ。仲好くしねえじゃあいけねえぜ」

「はい」と、お霜は口のうちに答えた。

次郎兵衛は勿論、ほかの女たちが立ち廻ったならば、すぐにこの自身番へとどけると云い聞かせて、半七はここを出た。それから半丁ほども行くと、八丁堀の坂部治助に出逢った。坂部は市中見廻りの途中であつた。

「半七。天狗はどうしてくれるのだ。不人情な事をするなよ」と、坂部は笑いながら行き過ぎた。

冗談のように云つてはいたが、坂部は半七の怠慢を責めたのである。不人情と責められては、いよいよ捨て置かれなくなつたので、彼はその晩、子分の亀吉を自宅へ呼び付けた。

「おい。御苦労だが、二、三日の旅だ。船に乗ってくれ」

「船へ乗って何処へ行きます」

「花川戸から乗るのだ」

「川越ですか」と、亀吉はうなずいた。「なにか見当が付きましたかえ」

半七から今日の話聞かされて、亀吉は又うなずいた。

「ようがす。そんな事なら訳はありません。わっし一人で行って来ましょう」

「二人で道みちゆき行をするほどの事でもあるめえ。よろしく頼むぜ」

相当の路用を渡されて亀吉は帰った。あくる日の午過ぎに、半七は再び外神田の自身番を見まわると、五平は待ち兼ねたように訴えた。

「どうも困ったものです。きのうもお前さんにあれほど云い聞かされたのに、番太の女房はゆうべも夫婦喧嘩をはじめて、女房はどこへか出て行ってしまったそうで……」

「きょうになつても帰らねえのか」

「帰りません。亭主の要作も心配して、もしや身でも投げたのじやあ無いかと、町内の用を打つちやつて置いて、朝から探して歩いているのです」

「仕様がねえな」と、半七は舌打ちした。

五平の話によると、お霜は八年振りで見かねて来た弟をひどく可愛がつているらしく、その肩を持って亭主と衝突することがしばしばある。次郎兵衛の家出も、要作が無理押しに我意^{がい}を押し通そ

うとしたからである。若い者をあたまから叱り付けて、なんでもおれの云う通りになれと云えば、若い者は承知しない。結局ここを飛び出して、天狗騒ぎなどを惹き起こす事にもなったのであると、お霜は亭主に食ってかかると、要作も黙っていない。本人の為にならない事は飽くまでも叱るのが兄の役目で、むやみに家出などをするのは本人の心得違いである。それが為に、おれ達もどんな巻き添えの憂き目を見るかも知れない。飛んだ弟を持って災難であると、要作は云う。この喧嘩がたびたび繰り返された末に、ゆうべは最後の大衝突となつたらしい。

「となりの喧嘩はわたし達も薄々知っていましたが、また始まつたのかといひ加減に聞き流していましたら、飛んだ事になつてし

まっつて、親分にも申し訳がありません」と、五平は恐縮していた。まさかに死ぬほどの事もあるまいと思うものの、気の狭い女は何を仕でかすか判らない。困ったものだど半七も眉をひそめた。

四

それから足掛け四日目の夕がたに、亀吉が帰って来た。

「親分。大抵のことは判りました」

「やあ、御苦労。まあ、ひと息ついて話してくれ」と、半七は云った。

「まず本人の次郎兵衛の方から片付けましょう」と、亀吉はすぐ

に話し出した。「次郎兵衛の家にはおふくろと兄貴が^{うち}ありまして、まあ、ひと通りの百姓家です。本人は江戸へ出て屋敷奉公をしたいと云うので、二月の晦日^{みそか}に家を出て、午^{ひる}の八ツ半（午後三時）の船に乗ったそうです。兄貴が河岸^{かし}の船場まで送ったと云うから、間違いは無いでしょう」

「二月の晦日に船に乗ったら、明くる日の午頃には着く筈だ。ところが、次郎兵衛は三日に姉のところへ尋ねて来たと云う。そのあいだに二日の狂いがある。その二日のあいだに、どこで何をしていたかな。それからお磯の方はどうだ」

「お磯の家は相当の百姓だったそうですが、親父の駒八の代になつてから、だんだんに左^{ひだりまえ}前^{まえ}になつて総領娘のお熊に婿を取る

と、乳呑児ちのみごひとりを残して、その婿が死ぬ。重ねがさねの不仕合

わせで、とうとう妹娘のお磯を吉原へ売ることになったそうです」

「お磯は売られて来たのか」と、半七はすこし意外に感じた。

「そこで、そのお磯は次郎兵衛と訳があつたのか」

「そうじゃあねえと云う者もあり、そうらしいと云う者もあり、

そこははつきりしねえのですが、なにしろ仲好く付き合つていて、

次郎兵衛が江戸へ出るときは、お磯も河岸かしまで送つて来て、何か

じめじめしていたと云いますから、恐らく訳があつたのでしょう

ね」

「川越辺では今度の一件を知っているのか」

「城下では知っている者もありましたが、在方ざいかたの者は知りませ

ん。どつちにしても、お城にこんな事があつたそうだ位の噂で、川越の次郎兵衛ということは誰も知らないようです。本人の親や兄貴もまだ知らないと見えて、みんな平気でいました。近いようでも田舎ですね」

「お磯の勤め先は吉原のどこだ」

「それがよく判らねえので……」と、亀吉は首をかしげながら云つた。「江戸の女衞せげんが玉を見に来て、二月の晦日にいったん帰つて、三月の二十七日にまた出直して来て、金を渡して本人を連れて行つたそうですが、その勤めさきを駒八の家では秘し隠しにしているのです、どうも確かに判りません。御用の声でおどかせば云わせる術すべもあります、なにかの邪魔になるといけねえと思つて、

今度は猫をかぶつて帰つて来ました。なに、近いところだから造^ぞ作^{うさ}はねえ、用があつたら又出掛けますよ」

「その女衞はなんという奴だ」

「戸沢長屋のお葉^{よう}です」

「女か」

「亭主は化け地蔵の松五郎といつて、女衞仲間でも幅を利かしていた奴ですが、二、三年前から中^{ちゆう}氣^{うき}で身動きが出来なくなりました。女房のお葉は品川の勤めあがりで、なかなかしつかりした奴、こいつが表向きは亭主の名前で、自分が商売をしているのですが、女の方が却つて話がうまく運ぶと見えて、いい玉を掘り出して来るといふ噂です。年は三十五で、垢抜けのした女ですよ」

「番太郎へ次郎兵衛をたずねて来たのは、そのお葉だな」

「それに相違ありません。あしたすぐに行つてみましょう」

「むむ。今度はおれも一緒に行こう」

あくる朝の四ツ（午前十時）頃、半七と亀吉は小雨こさめの降るなかを浅草へむかった。戸沢長屋は花川戸から馬道の通りへ出る横町で、以前は戸沢家の抱え屋敷であつたのを、享保年中にひらいて町屋まちやとしたのである。そこへ来る途中、馬道うまみちの庄太に逢つた。「いい所で逢つた。おめえは土地っ子だ。手をかしてくれ」と、半七は云つた。

「なんです」と、庄太も摺り寄つて来た。

あらましの話を聞かされて、庄太は笑つた。

「戸沢長屋のお葉……。あいつなら好く識っています。雨の降るのに大勢がつながって出かけることはねえ。わっしが行つて調べて来ますよ」

「だが、折角踏み出して来たものだ。どんなどころに巢を食つているか、見てやろう」

三人は傘をならべて歩き出すと、やがてお葉の家の前に出た。

小綺麗な仕舞家暮らしで、十五、六の小女がしきりに格子を拭いていた。この天氣に格子を磨かせるようでは、お葉は綺麗好きの口やかましい女であるらしく思われた。半七と亀吉を二、三軒手前に待たせて置いて、庄太はその小女に声をかけようとする処へ、お店の番頭らしい四十五、六の男が来かかった。彼は庄太を識つ

ていると見えて、挨拶しながら近寄って何か小声で話していた。

「馬鹿に長げえなあ。雨のふる中にいつまで立たせて置くのだ。

親分、どうしましょう」

「まあ、待つてやれ。なにか大事の用があるのだろう」

やがて庄太は引つ返して来て、かの男は馬道の増村という大きな菓子屋の番頭宗助であるが、親分たちにちよつとお目にかかりたいから、御迷惑でもそこまでお出でを願いたいと云う。それには仔細があるらしいから、ともかくも来てくれまいかと云った。

余計な道草を食うことになると思つたが、半七らもよんどころなしに付いてゆくと、宗助は三人を近所の小料理屋の二階へ案内した。庄太に紹介されて、宗助は丁寧な挨拶した上に、飛んだ御

迷惑をかけて相済みませんと繰り返して云った。

「実はね、親分」と、庄太は取りなし顔に云い出した。「今この番頭さんから頼まれた事があるのですが、お前さん、まあ聴いてやってくれませんか」

その尾について、宗助も云い出した。

「御迷惑でございましたが、まあお聴きを願いたいのでございます。手前の主人のせがれ民次郎は当年二十二になりました、若い者の事でございますから、少しは道楽もいたします。ところが、先月以来戸沢長屋のお葉という女が時々店へ参りまして、若主人を呼び出して何か話して帰ります。それがどうも金の無心らしいので、手前もおかしく思つて居りますと、おとといは見識らな

い男を連れて参りまして、相変らず若主人を表へ呼び出して、なにか強^{こわもて}一面に嚇かしていたようで、二人が帰つたあとで若主人は蒼い顔をして居りました。あまり不安心でございますから、手前は人のいない所へ若主人をそつと呼びまして、これは一体どういう事かといろいろに訊きましたが、若主人はその訳を打ち明けてくれませんで、唯ため息をついているばかりでございます。御承知でもございましたが、お葉は松五郎という女衞の女房で、手前どものような堅気な町人に係り合いのあろう筈はございません。それが毎度たずねて来て、なにか無心がましいことを云うらしいのは、どうも手前どもの腑に落ちません。年上ではありますが、お葉もちよいと垢抜けのした女ですから、もしや若主人とどうか

しているのではないかと思ひまして、それもいろいろ詮議したの
でございませうが、決してそんな覚えはないと若主人は申します。
そうなるといよいよ理窟がわかりません。実を申しますと、若主
人にはこの頃、京橋辺の同商売の店から縁談がございまして、目
出たく纏まりかかつております。その矢先きへお葉のような女が
たびたび押しかけて参りまして、その縁談の邪魔にでもなりまし
ては甚だ迷惑いたします。主人夫婦も若主人を詮議いたしました
が、やはり黙っているばかりで仔細を明かしません。あまり心配
でございませうので、主人とも相談いたしましたして、いつそお葉の家
へ行つて聞きただした方がよかろう。仔細によつては金をやつて、
はつきりと埒を明けた方がよかろう。かういうつもりで唯今出て

まいりますと、丁度そこで庄太さんに逢いまして……。庄太さんの仰しやるには、お葉もなかなか食えない女だから、お前さんたちが迂闊うかつに掛け合いに行くと、足もとを見て何を云い出すか判らない。これは親分に一応相談して、いいお知恵を拝借した方がよからうと申されましたので、お忙がしいところをお引き留め申しまして、まことに恐れ入りました」

「そこで、どうでしょう、親分」と、庄太は引き取つて云つた。「なまじい番頭さんなぞが顔を出すよりも、わっしが名みようだい代だいに出かけて行つて、ざつくばらんにお葉に当たつてみた方が無事かと思ひますが……」

「そこで、よもやとは思うが、若旦那とお葉とはまったく色恋の

いきさつは無いのですね。相手は亭主持ちだから、そこをよく決めて置かないと、事が面倒ですからね」と、半七は宗助に訊いた。「さあ、わたくしには確かなことは判りませんが……」と、宗助は考えながら答えた。「唯今も申す通り、本人は決してそんな覚えはないと申しております」

女中が酒肴を運び出して来たので、話はひと先ず途切れた。式かたのごとくに猪口ちよこの遣り取りをしているうちに、雨はますます強くなつた。

「お店たなの若旦那の遊び友達はどんな人達です」と、半七は猪口をおいて訊いた。

「そうでございます……米屋の息子さん、呉服屋の息子さん、小

間物屋の息子さん、ほかに三、四人、どの人もここらでは旧い暖の簾れんの家の息子株で、あんまり人柄の悪いのはございませんと、宗助は指を折りながら答えた。

「お葉はおまえさんの店ばかりで、ほかのお友達の家へは行きませんか」

「さあ、どうぞございませうか」

「若旦那はどんな遊び方をします」

「それはよく存じませんが、なんでも太鼓持や落語家はなしかの芸人なぞを取巻きに連れて、吉原そのほかを遊び歩いているように聞いて居りますか……」

「おおだな大店の若旦那だから、大方そんなことでしょうね」と、云い

ながら半七は少し考えていたが、やがて又しずかに云い出した。

「じゃあ、番頭さん、ともかくもこの一件はわたくしに任せて下さい。庄太の云う通り、おまえさんが顔を出すと、相手は足もとを見て、大きなことを吹っかけるかも知れねえ、そうになると、事が面倒ですから、わたくしの一手で何とか埒を明けましょう。しかし番頭さん、こりやあどうしても唯じゃあ済みそうもねえ。五十両や百両は痛むものと覚悟しておくんさい」

「はい、はい。それは承知して居ります」

勿論そのくらいの事は覚悟の上であるから、いつまでもあと腐れのないように宜しくお願い申すと、宗助は云った。

五

増村の番頭に別れて料理屋を出ると、門の葉柳は雨にぬれてなびいていた。

「まだ降つていやあがる。親分、これからどうします」と、庄太は訊いた。

「お葉の家はあと廻しにして、おれが急に思い付いたことがある」と、半七は歩きながら小声で話した。「増村の息子に訊いても口を結んでいるかも知れねえから、その友達を詮議してみる。近所に呉服屋や小間物屋の遊び仲間があると云うから、それを訊いて廻ったら大抵は判るだろう。その連中が取巻きに連れ歩いている

太鼓持や落語家のうちに、素姓の変っている奴があるか無いか、それを洗ってくれ。お葉に掛け合いを付けるのは、それから後のことだ」

「ようがす。受け合いました」

庄太は二人に別れて立ち去った。

「じゃあ、これで引き揚げですかえ」と、亀吉は少し詰まらなそうに云った。「これじゃあ浅草まで酒を飲みに来たようなものだ」

「その酒も飲み足りねえだろうが、まあ我慢しろ。これでお城の一件もどうか当たりが付きそうに思うのだが……」

「そうですかねえ」

「まだ判らねえか」

「判りませんねえ」

「じゃあ、まあ、ぶらぶら歩きながら話そうか」

ふたりは吾妻橋の袂から、往来の少ない大川端へ出て、傘をならべて歩いた。

「実は今、あの番頭の話を聴いているうちに、おれはふいと胸に泛かんだことがある。おめえ達が聴いたら、あんまり夢のような当て推量だと思ふかも知れねえが、その当て推量が見事にぽんと当たる例がたびたびあるから面白い」

「そこで、今度の当て推量は……」

「まあ、こうだ」と、半七はうしろを見かえりながら云い出した。

「お城の一件は、あの息子たちの趣向だな」

「悪い趣向だ。途方もねえ。なんぼ何だつてそんな事を……」と、
亀吉は問題にならないと云うように笑っていた。

「それだから夢のようだと云っているのだ。おれの当て推量はまあ斯うだ。おめえも知っているだろうが、この頃は世の中がだんだんに変わつて来て、道楽もひと通りのことじゃ面白くねえと云う連中が殖えて来た。三、四年前の田舎源氏いなかげんじの一件なんぞがい手本だ。みんなひどい目に逢いながら、やつぱり懲りねえらしい。増村の息子をはじめ、その遊び仲間くめんは工面のいい家の息子株だ。大抵の遊びはもう面白くねえ、なにか変つた趣向はねえかと云ううちに、誰が云い出したか、たぶん増村の息子だろう、お城の玄関前で踊つた奴には五十両やるとか、歌つた奴には百両やる

とか、冗談半分に云い出したのが始まりで、おれがやるという剽ひ
軽ようきんもの者があらわれたらしい」

「違いえねえ」と、亀吉は思わず叫んだ。「わっしはすっかり忘れていた。そうだ、そうだ。石屋の安の野郎の二代目だ。親分は覚えがいいな」

今から七、八年以前のことである。神田川の河岸かしにある石屋のせがれ安太郎が、友達五、六人と清元の師匠みつけの家みつけに寄り集まったとき、その一人が云い出して、桜田門の見附みつけの榊形みつけのまん中に坐つて、握り飯三つと酒一合を飲み食みいた者には、五両の賞金を賭けると云うことになった。よろしい、おれがやって見せると引き受けたのが安太郎で、ひそかに準備をしているうちに、それが

早くも両親の耳にはいつて、飛んでもない野郎だと大目玉を食わされた。勿論その計画は中止されたばかりでなく、そんな奴は何を仕でかすかも知れないと云うので、安太郎はどうとう勘当された。

江戸末期の頽廢期には、こんな洒落をして喜ぶ者が往々ある。今度の一件もその二代目ではないかと、半七は想像したのであつた。それを聞いて、亀吉も俄かに共鳴した。

「親分、夢じゃあねえ、確かにそれですよ。安のような職人とは違つて、みんな大店の若旦那だから、さすがに自分が出て行くと云う者はねえ。取巻きの太鼓持か落語家のうちで、褒美の金に眼が眩くれて、その役を買つて出た奴があるに相違ねえ。洒落にしろ、

悪戯いたずらにしろ、飛んだ人騒がせをしやあがるな」

「だが、その太鼓持か落語家は、相当に度胸がなけりやあ出来ねえ芸だ。まじめじゃあ助からねえと思つて、氣ちがいの振りをしたのだろうが、川越の屋敷から町奉行所へ引き渡される途中で縄抜けをしている。これが又、誰にでも出来る芸じゃあねえから、なにかの素姓のある奴に相違ねえ。庄太に調べさせたら、大抵わかるだろう」

「お葉も係り合いがあるのでしようね」

「川越次郎兵衛の笠がある以上、お葉もなにかの係り合いがありそうだ。ともかくもお葉はその一件を知つていて、増村の息子を嚇かしているのだろう。それが、表向きになりやあ、唯じゃあ済

まねえ。本人は勿論、親たちだつて飛んだ巻き添えを食うのは知れたことだ。息子も今じやあ後悔して、蒼くなつてゐるに相違ねえ。そこへ附け込んで、お葉は口留め料をゆすつてゐる。それも相手を見て、大きく吹っかけてゐるのだろう。よくねえ奴だ」

「お葉と一緒に増村へ行つたという奴は何者でしょう」と、亀吉は訊いた。

「それは判らねえが、あの辺をごろ付いてゐる奴か、女衞仲間の悪い奴だろう。亭主が中気で寝てゐると云うから、お葉も男の人ぐらゐは拵えているかも知れねえ」

こういう時に、路ばたの露路から不意に飛び出した女がある。彼女は傘もささずに、はだし跣足で雨のなかを横切つて行くのを、半七

は眼早く見つけた。

「あ、いけねえ」

半七は傘をなげ捨てて、これも跣足になって駈け出した。今や大川へ飛び込もうとする女の帯は、うしろから半七の手につかまれた。亀吉もつづいて駈け寄ると、露路の中から男と女が駈け出して来た。

「おめえは番太の女房だな。まあ、おちついておれの顔をよく見ろ」と、半七は云った。

半氣違いのようになっていた女房も、半七と知って急におとなしくなった。あとから追って来たのは、お霜の亭主の要作と、この露路の奥に住んでいるお高という女であった。

雨のなかではどうにもならないので、人々はお霜を取り囲んで露路の奥へはいった。ここらには囲い者の隠れ家が多い。お高もその一人で、以前は外神田の番太郎の近所に住んでいて、お霜に洗濯物などを頼んだこともある。お霜は夫婦喧嘩の末に、あても無しに我が家を飛び出して、柳原のあたりをうろ付いていると、あたかもむかし馴染のお高に出逢った。

お高はもとより詳しい仔細を知らない。お霜も正直には云わないうで、唯ひと通りの夫婦喧嘩のように話していた。それにしても一応の意見を加えて自宅へ戻らせるのが当然であるが、お高はお霜に味方して、当分はわたしの家に隠れていると云った。

心あたりを探し尽くして、もしやとここへ尋ねて来た要件は、

女房のすがたを見いだして呶鳴りつけた。お霜も負けずに云いかえした。お高もお霜の加勢をした。女ふたりに云い込められて、逆^{のぼ}上せあがった要作は、女房の髪をつかんで滅茶苦茶になぐった。お霜も嚇^{かつ}とのぼせて、いつそ死んでしまおうと川端へ飛び出したのである。その頃の大川は身投げの本場であつた。

その留め男が半七であると判つて、要作もお高も恐縮した。濡れた着物を拭くやら、汚れた足を洗わせるやらして、彼等はしきりに半七にあやまつた。

「いや、あやまる事はねえ。そこで、番太のかみさん。おめえにもう一度訊きてえことがある」

半七はお霜を二階へ連れてあがると、そこは三畳と横六畳のふ

た間で、座敷の床の間には杜かきつばた若たが生けてあつた。東向きの縁側の欄干を越えて、雨の大川が煙けむつて見えた。その六畳に坐つて、彼はお霜と差し向かいになつた。

「もうひと足の所でおめえはどぶんを極めるところだつた。それを助けた半七はまあ命の親というものだろう」と、半七は笑いながら云つた。「命の親に嘘を云うのは良くねえことだ。これから正直に返事をしてくれねえじゃあいけねえよ」

「はい」と、お霜は散らし髪かみの頭を下げた。

「いいかえ。嘘を云わねえ約束だよ」と、半七は念を押した。

「おめえはこの間、おれに嘘をついたね」

「いいえ、そんな」

「下に来ているのは子分の亀吉という奴で、実はきのう川越から帰つて来たのだ。おれの方でもひと通りは調べてある。おめえはおれに隠しているが、弟のゆくえを知っているのだらうな。きようは花川戸のお葉のところへも廻つて来て、その帰り道で丁度におめえに逢つたのだ。さあ、正直に云つてくれ。おれの方から云つて聞かせてもいいが、それじゃあおめえの為にならねえ。おめえの口から正直に種を明かして、このあいだ嘘をついた罪ほろぼしをした方がよからうぜ。それとも何処までも強情を張つて、嘘を云い通すのか」

きよがさ
気嵩のようでも根が正直者のお霜である。かまをかけられて恐れ入つたらしく、さつきから下げている頭を畳に摺りつけた。

「恐れ入りましたでございます」

「次郎兵衛はその後におめえの家へ立ち廻ったな」

「はい。二十七日の宵に忍んで参りました」

「そうして、どこへ行った」

「どうしても江戸にはいられない。といって、村へ帰ることも出来ない。相州大磯の在に知り人があるから、一時そこに身を隠していると申しますので、亭主には内証で少々の路用を持たせてやりました」

それを亭主の要作さとに覺さとられたのが夫婦喧嘩のもとであり、家出のもとであると、お霜は白状した。

「次郎兵衛はどうしてお葉と懇意になったのだ」と、半七はまた

訊いた。

「船のなかで……」と、お霜は答えた。「御承知でもございませうが、川越から江戸へ出ますには、新河岸川から夜船に乗ります。その船のなかで懇意になったのだそうでございます」

お磯の身売りについて、お葉は玉の下見したみに行つた。その帰りの船が次郎兵衛と一緒にあつたので、互いに心安くなつた。乗合いは田舎道者いなかどうじやや旅商人たびあきんど、そのなかで年も若く、在郷者には不似合いのきりりとした次郎兵衛の男ぶりがお葉の眼に付いたらしく、船場で買った鮎や饅頭などを分けてくれて、しきりに馴れなれしく話しかけた。むかしの夜船はとかくにいろいろの挿話を生み易いものである。

その一夜をいかに過ごしたか、お霜もよくは知らないのであるが、晦日みそかに川越を立つて三月の朔ついたち日に花川戸へ着いたお葉は、すぐに次郎兵衛と手を分かつことを好まなかつた。自分の家は眼の先きにあると云つて、ひと先ず彼を我が家に連れ込んで、中気で寝ている亭主の手前はなんと云いつくろつたか、ともかくも二日のあいだは次郎兵衛を二階に引き留めて置いた。三日の午過ぎに、彼はようよう放たれて出たが、そのときにかの川越次郎兵衛の笠を置き忘れて来たのであつた。

奉公先きに対する意見の相違で、彼は義兄あにの要作と衝突した。もう一つには、二、三日後には必ず尋ねて来てくれと、お葉から堅く念を押されているので、次郎兵衛はふらふらと飛び出して戸

沢長屋へたずねて行くと、お葉はよろこんで迎えた。しかも自分の家に長く泊めて置くのは亭主の手前もあるので、お葉は近所のおきつという女髪結かみゆいの二階に次郎兵衛を預けた。自分がいい仕事を見つけてやるから、武家奉公などは止めにしろとお葉も云つた。

こんなことで幾日かを夢のように送っているうちに、主婦あるじのおきつが何処からか聞いて来て、江戸城の天狗の一件を話した。証の笠に川越次郎兵衛と書いてあったという噂を聞いて、本人の次郎兵衛は顔色を変えた。早速それをお葉に話して、自分の笠を誰が持ち出したのかと詮議したが、お葉は一向知らないと空呆そらとぼけていた。そんなことはちつとも心配するに及ばないと、彼女は

平気で澄ましているのであった。

しかし次郎兵衛は安心していられなかった。たとい誰が持ち出したにせよ、その笠に自分の名がしるされてある以上、自分も係り合いを逃のがれることは出来ない。事件が重大であるだけに、どんな重い仕置を受けるかも知れないと、年の若い彼は一途いちぢずに恐れおののいた。近所の湯屋や髪結床でその噂を聞きたびに、彼は身がすくむほどにおびえた。

そのうちに、一方のお磯の身売りの相談がまとまって、お葉は本人を引き取るために再び川越へ出て行ったので、その留守のあいだに次郎兵衛は逃げ出した。恐怖に堪えない彼は、どうしても江戸に落ち着いていられないのであった。さりとして故郷へも戻ら

れないので、彼はお霜から幾らかの路用を貰つて大磯へ逃げた。

これだけの事を知つていながら、お霜は弟が可愛さに、今まで秘密を守つていたのであつた。

「先日のお調べにいろいろ嘘を申し上げまして、まことに申し訳がございません」と、お霜は再び頭を下げた。

「そこで、そのお磯という娘は次郎兵衛と訳があつたのか」と、半七は訊いた。

「それは弟もはつきり申しませんでした……」と、彼女は答へた。「お磯はお葉という女に連れられて江戸へ出て来ますと、次郎兵衛は姿を隠してしまつて、女髪結の二階にはいないので、お葉はおどろいて真つ先きにわたしの家へたずねて参りましたが、

先日も申し上げました通り、どこまでも知らないと言いつつて帰しました。その晩にお磯が又、お葉の家をぬけ出して尋ねて来まして、自分は今度吉原へ勤めをすることになった。その訳は次郎さんもよく承知しているが、吉原へ行つてしまえば又逢うことは出来ないから、もう一度逢わせてくれと申します。これもはつきりとは云いませんでしたが、どうも弟と訳があるらしいので、わたくしも可哀そうだと思いましたが、弟のゆく先を話して聞かせるわけには参りません。話したところで、大磯まで逢いに行かれるものでもありませんから、わたくしは心を鬼にして、知らない知らないと言いつつて、邪慳じゃけんに追い帰してしまいました。お磯は泣いて帰りました」

その夜の悲しい情景を今更おもい起こしたのであろう、お霜はしくしくと泣き出した。

六

「お話が長くなりました」と、半七老人は云った。「これで大抵はお判りでしょう」

「そうすると、江戸城の一件は菓子屋の息子たちの悪戯いたずらなんですか」と、私は笑いながら訊いた。

「そうです。悪戯というよりも、こんな悪い洒落をして喜んでいたのですね。さつきもちよつと申し上げました田舎源氏の一件と

いうのは、堀田原の池田屋の主人が友達や芸者太鼓持を連れて、柳亭種彦の田舎源氏のこしらえで向島へ乗り出したのです。田舎源氏は大奥のことを書いたとかいっているので、非常に事が面倒になって、作者の種彦は切腹したという噂もあるくらいです。それを平気で、みんな真似をしたのですから、無事に済む筈はありません。関係者二十六人はみんなお咎めに逢いました。それでも懲りないで、とかくに変った事をして見たがる。江戸の人氣じんぎがそんなふうになったのも、つまりは江戸のほろびる前兆かも知れません。増村の息子たちもやはりそのお仲間で、向島の大七という料理屋で飲んでいる時に、お城の玄関に立って天下を渡せと云う者があれば、五十両の褒美をやると冗談半分に云い出したのが始まりで、

それを引き受けるという者があらわれたのです」

「それは何者です。太鼓持か落語家ですか」

「堀の太鼓持、つまり山谷堀さんやぼりの太鼓持で、三八という奴です。

なにしろ縄抜けをするくらいですから、唯の芸人じゃあないと睨んで、庄太にだんだん調べさせると、この三八というのは以前は上州の長脇指ながわきざし、国定忠治の子分であつたが、親分の忠治が嘉永三年にお仕置になつたので、江戸へ出て来て太鼓持になつたという奴。これも向島の六七に集まつた一人であることが知れましたから、恐らくこいつだろうと見込みを付けて、引き挙げてみると案の通りでした。こいつは不断からお葉の家うちへ出這入りしているので、次郎兵衛の笠を見つけて、これ幸い、詮議の眼をくらます

のに丁度いいと思つて、そつと持ち出したというわけで、次郎兵衛こそ飛んだ災難でした」

「じゃあ、その三八が野州の桑次郎なんですな」

「三八というのは芸名、生まれは野州宇都宮在で、桑蔵のせがれ桑次郎。こんな奴でもやはり昔の人間で、ほそのおがき臍緒書はちやんと持

つていたのです。もちろん太鼓持の姿で入り込んで、すぐに正体があらわれますから、田舎者に化けてお城へ乗り込み、いざというときには偽にせ気違いで誤魔化す計略。その芝居が万事とどこおりなく運んで、みんなからも大出来と褒められて、約束の五十兩を貰つて、三八はいい心持で引き退さがつたのですが、ここに又一つかの面倒が起こりました。と云うのは彼のお葉、こいつなかなか食

えない奴で、この一件を知ったから黙っていない。相手はおだな大店の若旦那株だから、嚇おどかせば金になると思つて啖くちい付きました」

「その相摺りは三八ですか」

「三八は五十両でおとなしく黙っていたのですが、お葉の亭主の松五郎には銀六という子分がある。そいつを連れて、お葉は増村へ嚇かしに行く。それも二十両や三十両なら、増村の息子も器用に出すでしょうが、お葉は三百両くれろと大きく吹っかける。いくら大店でも、その時代の三百両は大金で、部屋住みの息子の自由にはならない。とって、例の一件を親や番頭にも打ち明けられないので、自業自得とはいいいながら、増村の息子は弱り切つていたのです。ほかに同じ遊び友達があるのに、お葉がなぜ増村ば

かりを責めていたのかと云うと、増村の身代が一番大きいのと、最初にお城の一件を云い出したのは増村の息子だといふので、専らここばかりへ押し行つて、口留め金をくれなければ其の秘密を訴えると云う。これは強請ゆすりの紋切形ですが、ゆすられる身になると、それが世間へ知れては大変、わが身ばかりか店の暖簾のれんにもかかわる大事ですから、今さら後悔しても追つ付かない。その最中に事が露ばれて、まあ大難が小難で済みました」

「三八は高見たかみの見物ですか」

「いや、それだから大難が小難と云うので……」と、老人は顔をしかめて云つた。「三八は自分も係り合いだから、仲へはいつて三十両か五十両でまとめようと骨を折つたのですが、お葉は容易

に承知しない。三八も素姓が素姓だから気があらい。もう一つには、万一お葉の口からその秘密を洩らされたら自分の首にも縄が付く一件ですから、油断は出来ない。これがもう少しごた付いていると、三八は度胸を据えて、お葉と銀六を殺してしまう覚悟であつたそうです。恐ろしい太鼓持もあつたもので……。そんな事にもなつたら何もかもめちやくちやで、結局は万事露顕になるのでしたが、そこまで行かずに食い止めたのは仕合わせでした。

しかしここに困つた事は、三八を表向きに突き出すと、増村の店に迷惑がかかる。見逃がしてしまうと、わたくしが八丁堀の旦那に済まない。板挟みになつて困つたのですが、増村の番頭と相談の上で、お葉の方は三十両で形かたを付け、八丁堀の坂部さんの方

へは番頭同道で相当の物を持参、それでまあ勘弁して貰いました。つまりは一人も怪我人を出さずに済んだわけです。

いや、怪我人といえは彼の次郎兵衛、姉から知らせてやったのでしよう、この一件が無事に済んだ事を知って忽々に江戸へ戻つて来ましたが、江戸はおそろしい所だと云つてすぐに故郷へ帰ろうとするのを、姉夫婦にひき留められて、例の蠟燭問屋の万屋へ奉公することになりました。そうすると、その年の十二月二日は安政の大地震、店の土蔵が崩れたので、その下敷きになって死んでしまいました。どうしてもこの男には江戸が崇た崇たつていたと見え
ます。

この地震で、花川戸のお葉も死にました。お磯は吉原へ行つて、

逢染あいそめとかいう源氏名で勤めていたそうですが、これも地震で潰されたと云うことでした」

「みんな運の悪い人たちでしたね」と、わたしは溜め息をついた。「増村の家に地震の怪我人は無かったそうですが、店は丸焼けになつたので、その後は商売も寂れたようでした。今になつて考えると、江戸三百年のあいだに、どんな悪戯をしても、どんな悪洒落をしても、江戸城の大玄関前へ行つて天下を渡せと呶鳴つたものはない。全くこれが天下を渡す前触れだったのか知れませんか」

老人も嘆息した。

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（六）」光文社文庫、光文社
1986（昭和61）年12月20日初版1刷発行

入力…tatsuki

校正：菅野朋子

2000年1月12日公開

2004年3月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

半七捕物帳

川越次郎兵衛

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>